
『幻想郷』と書いて『作者の欲望』と読む

ヴォルフイード

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

『幻想郷』と書いて『作者の欲望』と読む

【Nコード】

N2539R

【作者名】

ヴォルフイード

【あらすじ】

すべては作者たちの妄想から始まった

すべては妄想から始まった

そこは何もない部屋だ。

明かりがないので周りは見えない。

不思議に思っているところから一筋の明かりがもった。

イスが置いてあり、そこに一人の男がすわっていた。????

「・・・・・・・・」

腕を組んで下を向いているので眠っているのか、起きているのかわからない。

ただ、そこにいるだけだった。

????

「・・・・・・・・。そこにいるのはわかっている。出てこい。」

そこは明かりのない部屋だ。あるのはどこからともなく彼を照らす明かりだけだ。

人の姿は見えないと思うのだが、彼はその暗闇に声をかける。

しかし誰も出てこない。

????

「ふざけてないでさっさと出てこい。」

誰に向かって言っているのかわからない。

????

「そこでゴチャゴチャ言っているキサマだ。」

あっ！私か。

まったく人がマジメに話をつくっているのにチミは何を言っているんだい？

????

「ど・こ・か、マジメな話だ。全てキサマの妄言だろう。」

まあまあ。・・・・・・・・おや？

????

「・・・・・・・・来たか。」

彼がそう言うのと円を描くように明かりが付き始めた。そこにはイスしかなかった。

・・・コツ・・・コツ。と足音が聞こえてきた。
???

「早いなスコープオン。お前が遅刻しないとはな。」

そう言って現れたのは、長すぎず短すぎない髪で、少々、寝癖がある男だった。それなりに体を鍛えているらしい。

スコープオン

「本当は後から誰かに聞くつもりで、サボるつもりだったんだけど。全員が集まるなんてないからね。最近、溜めすぎてね、そろそろ発散しないとね。もしかしたらそれがでくるところってね。」

楽しいそうに言っているのにその顔に表情はない。

スコープオン

「アレ？キミもいたんだね。」

YES。語り・解説・ボケ・ノリ・ツツコミのためにね。元気にしてたかい？

スコープオン

「それなりにね。でも、ストレスが・・・」

大丈夫×2。それについては心配ないよ。他の人はまだかな？

スコープオン

「もうすぐだと思うよ」

そう言ってスコープオンは空いているイスに座った。何か怪しい気配がするので目をこらしていると。

ギョロリと何かが光った。そこにいたのは・・・人間か。

???

「人を怪物にたいに言わないでくれ。」

えゝ。

???

「今スグ辞退する！！」

ゴメンナサイ。

???

「わかればいいんだ。（あつかいやすいバカだ）」
何処にでもいそうな野球部少年＋メガネに言われたくないな。
???

「なんのことだ？（こいつ・・・まさかっ?）」
スコーピオン

「連夜はさ、見た日常識人でも中はかなり黒いからね。」

連夜

「くっ!!」

気にしない×2

連夜

「キラマに言われたくないっ！（下等な人間のくせにっ!）」
次はダレかな
???

「人が気持ちよく、夢にダイブしようとしてたのに。一体なん
だ。」

連夜

「キミか黒き勇者・・・（まさか悪魔のフラグメイカーも呼んで
いたとはな）」

スコーピオン

「もしかしてまたかい？」

黒き勇者「ふぁー！。ん？あ、たあ。色んな世界が見えるから情報
が・・・。」
???

「すまないな。今回はお前にも来てもらわなければいけなかったか
らな。」

ここにいる間はゆっくりできるから、少し休んだらいいよ。

黒き勇者

「あーっつと。そうする。」全員くるまでそっとしてあげようか。

連夜

「正気か？コイツは・・・」
「??？」

「わかっている。しかしコイツも必要な人間の一人だ。」連夜
「理由があるなら、それでいい。」

後は・・・
「??？」

「やあ。僕が最後かな？」

だね。癒しの風＞モエゝフォース＜（sou）
sou

「マジメな顔で言われると恥ずかしいな／／／」
スコピオン

「彼、本気？」

連夜

「あの顔・・・まさかな・・・」
「??？」

「これで全員か？」

みたいだね。ヴォルフイード後よろしくネ

「ちよつと!？」

ヴォルフイード

「まったく・・・。さて今回きてもらったのはオレたち全員がある
目的のためにとある場所に逝くためだ。」

「誤字にあらずっ!」

連夜

「その場所は？」

黒き勇者

「その前に何かいないか？」

ヴォルフイード

「そうだな・・・。顔面クローツ!!」

「ガハッ!？」

ヴォルフイード

「ヒイイイイト・エンドツツ!!」

「ギャヤヤヤツ!!」

ちゃんちゃん。

遠足の前日って楽しみで眠れないね

それじゃ改めて。皆には幻想郷に行ってもらいます。

sou

「それが今回の仕事ですか？あと・・・その恥ずかしいんですけど

／／／

souが今いる場所は妄言者（作者）の膝の上。

身長は170ぐらいあったのが今は120しかない。

連夜

「すっかり女の子だな。sou」

スコピオン

「よく”男の娘”って聞くけど、実際に見ると・・・」

ここは個人の好きな”男の娘”を妄想してください。

sou

「れ、連夜。スコピオン。二人ともヒドイよ！ボクは男だ！」

反抗する姿もかわいいねえ。オン持ち帰り。

sou

「うつ・・・グスッ。ヒドイよ・・・グスッ。」

黒き勇者

「ダメじゃないか三人とも。”女の子”を泣かしちゃ。」

あっ！！

sou

「ヒック・・・ヒック・・・」

連夜

（キミはバカか？今そんな事を言ったらどうなるか。）

黒き勇者

（え？souって男だったの？）

スコピオン

（こうゆうシチュエーションも好きだけど。）

ヴォルフイード

（妄言者。自分でまいた種だ。なんとかしろ。）

「ほら泣かないで。カワイイ顔がもったいないよ。」

S o u

「・・・・・・・・むう。」

「ほくらニツコリ。」

S o u

「・・・・・・・・プイッ。」

連夜

（作品に名前のない犬は出てくるな。）

犬（一応、主人公・DHMO）

（ヒドッ！）

あーゴメン、ゴメン。向こうに行く時元に戻すから。

S o u

「・・・・・・・・ヤダ。もっとカッコよくして。」

（かわいいくなく。）わかった。だからもう少しだけいいかな。↑

キラースマイル

S o u

「・・・・・・・・うん／＼／＼」

ヴォルフイード

「ようやくか。ああ、それともう一人追加だ。」

スコーピオン

「まだ来るの？はやくしてよ。」

わかってるよ。それでは#くんです。どぞぞ。

#

「・・・・・・・・・・。」

あの＼#くん何か一言。

#

「・・・・・・・・よろしく。」

それじゃ皆、仲良くたのむよ。

ヴォルフイード

「ようやく説明できるな。」

犬（一応、主人公・DHMO）

「まってよ！オレどうなるの！」

メンドくさいな。DHMO（犬）、以上。

DHMO

「せめて犬を消して下さい。」

キミも消えるけど？

連夜

「DHMO〓犬か。」

そゆこと。じゃっ、説明するよ。

DHMO

「ちよい待ち！それ違うから！」

#

「………ダメレ、犬。」

DHNO

「ショーーック。」

チーーン。南無。

#

「………説明。」

ヴォルフイード

「助かる。今回は日頃の疲れをとるための休暇だ。」

つまり慰安旅行。

スコピオン

「楽しい所かい、その幻想郷って場所。」

それは保証するよ。

そこで行き先を決めてもらうために、ぬいぐるみを用意したんだけど………

ヴォルフイード・無し

DHNO・風見幽香（なぜか等身大）

黒き勇者・鈴仙& a m p; 早苗

スコピオン・映姫様

#くん・アリス& a m p; 永琳

連夜・天子

はぁ・・・君たちさ、自分の気持ちに正直なのはいいよ。
でもね、用意したと同時にあっさうのはどうかと思うよ。
で、君は何をやっているのかな？

s o u

「えっと・・・どのぬいぐるみを抱っこしたら気持ちいいかなって。」

ぬいぐるみを抱いては替えを繰り返していた。

D H M O

(モエ。)

連夜

(女・・・だな。確実に。)

(口に出すなよ。) じゃあ、このぬいぐるみはどうかかな？

s o u

「これって狐？こっちは・・・」

それは九尾。で、そっちはフカフカのユーレイ人形。

どっちも、もふつとしてるよ。(誰かは・・・OK?)

s o u

「ほんとだ！もふもふのフカフカだ」。 」

気に入ったようで。

じゃ、もう一人呼ぼうか。

スコピオン

「まだ？」

電話ですぐに来るよ。

では、スコピオン！！

スコピオン

「プルプルプルプル・・・」

黒き勇者

「眼鏡を外すと別人になるキミもいいね。」

D H M O

「W A ・ W A ・ W A 忘れ」

あ、もしもし准尉？ 妄言者です。

実は・・・で、それで・・・だからすぐ来てね。

連夜

「また一人増えるのか。何をしたんだキミは。」

何も。忙しくて遅れている人もいるんだよ。

??? 准尉

「失礼します。陸攻准尉です。」

待ってたよ。じゃっ、さっそくで・・・はあ、君も手が速いね。

陸攻准尉

「はい！ 自分は、いつでも直球勝負です！」

ガッチリホールドって感じに河城にとり（ぬいぐるみ）を抱きしめている。

ヴォルフイード

「確か陸軍だったな。ならついでに妖怪の山の周辺にでもいてくれ。」

「

陸攻准尉

「はっ！ 了解しました。」

よし。それでは今度こそ。

皆にはそのぬいぐるみの相手と『ラブ？ イチャ』してもらうことになるから。

もちろん、他の子と交友するのもOKだよ。とにかく自由にしていから。

D H M O

「（ゆうかりんゆうかりんゆうかりんゆうかりん）」

連夜

「（さて、どうやって・・・）」

何を考えているか知らないけど、とりあえず楽しんできて。

逝ってらっしゃい

ニヤリッ

集中しすぎるとさあ大事なことを忘れるよね

<最初の部屋・改め欲望の神殿>

欲望の神殿。

そこは”欲望の溢れる清き神々”が祀られている神聖な場所。

その昔、人々は苦しんでいた。重税や疫病などの苦しみに耐えていた。そんな時、人々の前に欲望神が現れた。

そしてこんな事を言ってしまった。『我慢する必要はない。己の内に溜め込んだ欲望を開放しろ。』と。

言ってしまったので後の祭り。各地で人々が暴走し始めた。

”百姓一揆”や”下剋上”、果ては”暗殺”といった事までしだした。

歴史書を見るとこの時代は”戦乱の世”と書かれている。

そんな事件の火種となったにも関わらず、欲望神は崇められた。今でも人々の心に宿る欲望を叶えている。

現在、そこを管理しているのが……

はあ、皆行っちゃったね……。少し寂しくなるかな。

さてと掃除でもするか。

バサバサ……フキフキ……ハキハキ……よっこらせ。

しかし昔の人よくこんなバカみたいにデカイ神殿をつくったな。

”戦乱の世”って欲望神が原因でしょ？

それを崇拜するとは物好きだね。

彼らが神様ねえ。

???

「ちょっとよろしいかしら？」

はいはい何で・・・（むっ、黒のショートで178か・・・スタイルも中々だ。しかし、顔は少し恐いな。）
???

「どうかしましたか？」

いえ、何でもありません。それで用件は？
???

「ええ。以前、ここに履歴書を送ったんだけど、連絡が一切こないのよ。」

はて履歴書？

うーん・・・・・・・・あっ！！

???

「思い出したの？」

いえ、キレイさっぱりわかりません。

ザクッ！！・・・・・・・・グフッ！！・・・・・・・・ドムッ！！・・・・・・・・

しばらくお待ちください。

???

「で・・・思い出してもらえたかしら？」

は、はい・・・・たぶん”執夢執”にあると思います・・・（以外に武闘派・・・・）
???

「あら？”執務室”じゃないの？」

いや”執夢執”だよ。ほらアソコ・・・・

と、指した方を向いてみると・・・・”執夢執”のプレートがあっ

た。

ここじゃ常識は通じないよ。少し待っててもらえるかい？

そう言って”執夢執”と書かれた部屋に入っていく管理人（妄言者）

<扉の向こうからかすかに聞こえる声>

えっと・・・どこにやったかな・・・これかな？

『主人公をギャグキャラにするネタ無限大』の本がここにあるからアッチかな。

『男の娘を落とす常識』、いやこの辺じゃないな・・・。

『腹黒をエグる技』、てことはこの辺か。

おっ！！あったあった。

一枚の紙を持って扉から出てきた。扉の向こうには何か蠢いたように見えた。

いやゝ待たせて悪かったね。
????

「見つかったのならいいけど・・・あの部屋は一体ナニ？」
あの部屋？人間なら即死だよ。
????

「あなたは人間じゃないと？」
否定はしないよ。

えっと名前は黒清音クロカノンさんね。

・・・の仕事の手伝いをしたいと？

黒清音

「ええ。私はあの人に憧れてここに來たの。あの人の力になりたいのよ。」

ここに来る連中の殆んどが神の助手なれば欲望を叶える力を持てると思ってるけど・・・

どうやら君は違うようだね。

黒清音

「ええ。私はあの人の手伝いがしたいだけ。それが私の”欲望”よ！！」

うん。なら採用だね。

さっそく仕事に入ってもらいたいんだけど・・・

黒清音

「何か問題があるの？」

うん、今全員いないから。

黒清音

「それじゃあの人・・・そんな・・・」

だからキミには研修旅行に行ってほしんだ。

黒清音

「研修旅行？」

そ。手伝うにしても他人の欲望を勉強しないとね。

研修先は『幻想郷』向こうに全員いるよ。

黒清音

「あの人にも会える？」

それはキミの行動によるから保証はできないよ。可能性はあるけど。

黒清音

「なら行くわ。仕事を手伝うにも勉強しないといけないのよね？」

それなら、この中から好きなぬいぐるみを選んでくれるかい？

黒清音

「そうね・・・この子が可愛いかしら。」

レミリアか・・・ならこのアイテムをプレゼント！！

黒清音

「ペンダント？にしてはヘンね。中のクリスタルに”妄”って書いてあるから。」

その名も

《目の前にいるけど透明人間》

それ付けてると視界に入らない限り気配を隠せる”欲望アイテム”
レミリアの能力に干渉されない・・・ただのスパイグッズだよ。

黒清音

「他にも何かありそうね。」

『誰にも見えない』って望めば誰もキミに気づかないよ。
それがあれば、グフフフ・・・

黒清音

「まさに”欲望”ね」

そゆこと。それじゃ行つてらっしゃい。

黒清音

「ええ、しっかりと勉強してくるわ。」
ほどほどにね。

楽しむことも大事だから。

黒清音

「そうするわ。」

こうしてまた一人『幻想郷』旅立った。

ふう～疲れた。それじゃ能力の説明をしとこうか。

- ・兵器を操る程度能力
- ・武器を操る程度能力
- ・妄想を顕現させる程度能力

分かりやすくすると

- ・兵器（ガンダム系・ロボット）を使える
- ・色んな武器を使える
- ・上記二つを出現させる

といった具合だ

- ・弾幕を出すには兵器を装着しないと出せない
- ・装着には妄想が必要
- ・装着したら兵器は武器になる
- ・武器を操る力が必要

この概念で一つの力だよ

それじゃ僕も準備しようか・・・

ウケケケケケケ・・・

『主人公』と書いて『最初の犠牲者』と読む人は……彼だ!!

それでは記念すべき幻想入りの第一話です。

タイトルがおかしい? そんな事はありませんよ。

あれで正解です。

彼にはフライパンの上で踊ってもらいましょう……

《ここは太陽の畑》

”太陽の畑”、そこは一面を向日葵がうめつくしていた。

一人の男が苦しそうに呼吸をしながら歩いてきた。

D H M O

「ハア……ハア……ハア……。ようやくか……。長い道だったよ……」

よほどツライ事があったのだろう。遠い目をしている。

D H M O

「どうして幻想郷に”阿部さん”がいるんだよ!」

《D H M O (フライパンの上のピエロ) の回想》

D H M O

「イッテ……。無事に着いたのか……。幻想郷に。」

周囲を確認すると木々が生い茂る場所だった。

どうやって太陽の畑に行こうかと悩んでいると……

配達員

「まいど〜幻想便です。」

配達員が現れた。

配達員

「DHMO様ですね？ハンコがサインをお願いします。」

DHMO

「じゃあサインで。D・H・M・Oっと。はいどうぞ。」

配達員

「ハイ、お荷物です。ありがとうございました。」

元気と笑顔は配達員にとって大切なモノだ。

DHMO

「ものすごく不安なんだよね。これの中身。」

そう思うのしかたがない。扱いがヒドかったから。

DHMO

「とりあえず開けようか。まずは・・・手紙？」

《拝啓 滑稽なピエロ様へ》

お元気ですか？始めての一人旅も不安だと思うのでプレゼントを送ります。

まずは太陽の畑への地図を入れます。

おやつはチョコレートを入れました。

能力はイメージをして名を呼べば装着できます。部分装着もできます。

それではお気をつけてb y妄言者

P・S

神は言っている――

D H M O

「地図に・・・おやつか。能力に関しても大丈夫そうだ。ただ・・・」

彼は息を吸い込むと思いつき叫んだ。

D H M O

「誰がピエロじゃあ!!」

じゃー、じゃー、じゃー（エコー）

D H N O

「とりあえず、歩いて行こうか。能力も使いたいし。」

そうして歩き出したD H M O

しばらく歩いていると・・・

ガサガサ・・・ガサガサ・・・と何かが近づいてきた。

D H M O

「さっそくか。能力の試しには丁度いい。かかってき・・・」
へ？」

そこに現れたのは・・・

阿部さん

「やあ少年。オレといいことや・ら・な・い・か」

くそみそ☆テクニクだった。

D H M O

「どうしてこんな所に？」

阿部さん

「それじゃ、さっそく・・・」

と、いきなり服を脱がしにくるくそみそ☆

D H M O

「うわっ！このままだと”後ろ”だけでなく”前”の貞操を・・・。
”両方”の始めてはゆうかりんに捧げるのに。」

阿部さんの攻撃を必死に避けるD H M O

このままでは貞操が・・・

D H N O

「くっっ！こうなったら・・・”ガンダムアシュタロンハーミット
クラブ”」

D H M Oの体が激しく光った

光が収まり、現れたのは”ガンダム”

阿部さん

「ずいぶんと変わった奴だな。そいゆうプレイか？」

D H M O

「これが”ガンダム”の・・・よしっ！！」

彼は勢いよくギガンティックシザースを叩きつけた

阿部さん

「くっっ！いいモノを持ってるな少年。」

叩きつけられても立ち上がる阿部

《一方、その頃の執夢執》

ん？始まったかな？少し覗いてみようか。
パッパッ。

《気になるあの子を遠眼鏡》

外見は普通の双眼鏡。

使い方はカンタン。

窓からコレを覗けば、アラ不思議。見たい所を……
さて、DHMOばどうかな？

あゝ相手はあの人か。

イケッ！そこだっ！あゝ惜しい。

《戻って二人の戦い》

DHMO

「くそっ！この人はバケモノか！」

阿部さん

「なんだい、もうへばったのか？早いんだな。」

DHMO

「くっ！まだだ！」

＜困ってるようだね＞

DHMO

「ちょいっ！気楽に言わないでくれ。こっちは貞操がヤバイんだ！」
＜分かってるよ。他にも武器はあるはずだよ？＞

DHMO

「いくら、くそみそ☆でも人間だから……」

＜しょうがないな。ミュージック！！＞

DHMO

「は？」

流れてきたのはお馴染みの
＜やらないか＞

D H M O

「おい！こんな時にその曲は流さないでくれー。」

<やらないか>

阿部さん

「何だこの曲？」

<(やらないか)>

<ゆらりゆらり揺れている 漢心ピュンチ♪>

<かなり かなり ヤバイのさ 助けてダーリン クラクラリン

♪(やらないか)>

<何もかもが新しい世界に 来ちゃたZE☆>

<たくさんのドキドキ 乗り越え 踏み越え I☆KU☆Z^{やらないか}O>

<やらないか やらららいか やら やらかいかい>

<この想いはとめられない>

<もつと漢ちつく☆パワー☆キラリン♪ ちょっと危険な

K A ☆ N ☆ J I >^{やらないか}

<やらないか やらららいか やら やらかいかい>

<もつとドキドキとめられない>

<もつとドラマチック☆恋☆ハレルヤ 二人だけでやらないか(

やらないか)

阿部さん

「いい感じの曲だな。ゾクゾクしてきた。」

<(よかったのか、ホイホイついてきて)>

<すごく すごく (大きいです・・・) 漢心チャ～ンス♪>

<ハート』とか』飛び出そう お願いダーリン はらはらりん(

やらないか) >

<お前だけを見つめてる 俺には知らんぷり>

<気づいて欲しいんだ ☆ときめき☆くそみと☆ ☆S U ☆K

I ☆ S A ☆ (やらないか) >

<やらないか やらららい か やら やらかいかい>

<その秘密を教えろよ>

<もっと漢ちつく☆モノ☆ぶくらりんりん やっぱ笑顔がス・テ・

キ? (やらないか) >

<やらないか やらららい か やら やらかいかい>

<よそ見してちゃ ダメダメよ♪>

<もっとロマンチック☆恋☆しゃくららんらん 奏でたいぜやら

ないか (やらないか) >

もうすぐ終わりだね・・・

<(O h・・・)>

阿部さん

「そろそろ準備はいいか?」

<(A h・・・)>

D H M O

「逃げなきや・・・ヤバイ、ヤバイ。でも、体が動かない?」

<(O h Y e a h・・・)>

<漢の子はいつだって 夢見る漢女なの>

<ピュア ピュアな心で 恋して愛して S! O! S O ア

ッーーーー! >

<やらないか やらららい か やら やらかいかい>

<この想いはとめられない>

<もつと漢ちつく☆パワー☆キラリンリン♪　ちよつと危険な

KA☆N☆JI>
やらないか

<やらないか　やららいいか　やら　やらかいかい>

<もつとドキドキとめられない>

<もつとド☆エロチック☆恋☆ハレルヤ　二人だけでやらないか>

<(お前、オレのケツの中でションベンしろ)>

<(それじゃ、とことん悦ばせてやるからな)>

<やらないか>

<(腹ン中がパンパンだぜ)>

<(俺はノンケだってかまわないで食っちまう人間なんだせ・・・)>

<やらないか(やらないか)>

歌が終わった・・・彼の貞操も・・・

D H N O

「まだだ。まだ・・・終わらんよ!」

阿部さん

「どうだい俺のモノは?」

D H M O

「すごく大きい・・・ってこれ以上言ったらオレがヤバイ。」

<早く倒さないと本当に危ないよ。>

D H M O

「でも相手は人間だからビームを使う訳には・・・」

<出るのは弾幕だよ。ビームを使うならビームサーベルしかないよ。

>

D H M O

「なら弾幕でっ!」

D H N Oはためらいながら弾幕を放った。

ギガンティックシザーズに内蔵されているビームキャノンは直射型の弾幕だ。

威力や命中精度はDHMOの腕による。

低級妖怪なら倒すことができるが今の相手はあの”阿部さん”だ。

阿部さん

「そんな攻撃じゃこの俺は満足しないぜ。」

DHMO

「くそっ！なんで当たらないんだ。あの人ほんとに人間か？」

＜生物学上では一応人間って書いてるけど＞

DHMO

「何で？どうして生物学の本に載ってるの？」

世界も認めるくそみそ☆テクニクだった。

＜弾幕が当たらないをじゃさ、ビームサーベルしか手段はないよ。＞

DHMO

「でも・・・人間を相手に・・・」

阿部さん

「スキだらけだぜ。」

一瞬の迷いが戦場では死に繋がる。

今は貞操か。

DHMO

「こうなりやヤケだ。うおおおっ！」

近づく阿部

迫るビームサーベル

阿部さん

「アッーーーーー！」

D H M O

「へ？」

<ビームサーベルは出力が強すぎるからね。ここではビームサーベル・スタンガンモードになるから。手もとで出力の調整ができるから。>

阿部さん

「今のは結構シビれる攻撃だったな。次はこっちがシビれさせてやるよ。」

D H M O

「えっ、いや、ちょっと！」

<はあ、しかたないな。妄符『作者・The・ワールド』>

時は止まる

作者が都合よく話を進めるために

<よし。次はこの《おさわり皆勤賞》で、阿部さんのケツを突き出して、そこにビームサーベルを当てて……っと。>

『も〜いい〜よ〜』

そして時は動きだす……悲劇、いや喜劇の始まりだ

阿部さん

「アッーーーーー！」

D H M O

「一体……？どうしてこんなことに……」

怯えるのも仕方がない。

思わず目をつぶり、気がついたら手に持っているサーベルがトンネ

ルに深々と・・・・・・・・

<さすが主人公。火事場に強いね。>

D H M O

「そ、そうかな？は、はは・・・」

<片付けはやつとくから、早く行くといいよ。>

D H M O

「そうだな。早くゆかりんに会いたいし。」

そして彼の姿が見えなくなって・・・

<もういいですよ阿部さん>

阿部さん

「ん？もういいのか？」

トンネルからサーベルを抜き、立ち上がる阿部。

<すいません。付き合ってもらっちゃって。>

阿部さん

「いや。これも”試練”の一つだ。彼だけでなく他の者たちにも成長してもらわないといけないからな。」

<で、どうでした？>

阿部さん

「まだまだヒョッコだな。今後に期待させてもらうさ。」

彼は静かに立ち去り、森の中に姿を消した。

<今後・・・か>

《回想終了。そして今は》

《テイク1》

D H N O

「いやー、それにしても花、花、花だな。」

????

「ここに何かようかしら？」

のんびり花を見ていたD H M Oに背後から声をかける女性がいた。
そして振り向き様に

D H M O

「虐めて下さい！」

土下座した。

????

「いいわよ。サヨナラ。」

降り下ろされる日傘。

ヒュ・・・グシャ・・・

『B A D E N D』

《テイク2》

D H M N

「太陽の畑、想像してた以上にスゴいな。」
????

「あなた、ここに何かようかしら？」

後ろから声をかけられたので振り向いてみると赤い服の女性がいた。

???

「もう一度だけ聞いわ。ここに何かようかしら？」

D H M O

「美しい花畑があると聞いてね。この目で見に来たのさ。」
???

「ここに来る途中に妖怪に襲われなかったの？」

D H M O

「いや、妖怪じゃないけどバケモノ（くそみそ☆）になら襲われたな。」
???

「それで？」

D H M O

「一応、倒したけど。」
???

「そう。なら……」

心臓に向かって突き出される日傘。

それを避けずに

ドスッ……ブシャア……

???

「アラ？せっかく楽しめそうだったのに、残念♪」

『B A D E N D』

《テイク3》

D H M O

「思った以上に広いな。会えるのか？」
???

「誰に会えるの？」

D H M O

「そりゃ、この花畑に住んでる女性にだよ。」
「??？」

「ふーん。会ってどうするの？」

D H M O

「もちろん、って・え？」

「??？」

「始めまして。私があなたの会いたがっている人物、風見幽香、妖怪よ。」

D H M O

「・・・・・・」

幽香

「妖怪と聞いて恐くなったかしら？」

D H M O

「くっ・・・・よっ・・・・よっ・・・・」

<おっと妄符『欲望・The・ワールド』>

時は止まる。さあ欲望を吐き出せ

D H M O

「よっしゃあー！ー！よーやく会えたー！ー！すう・・・・ゆーー
かりーんー！ー！ー！」

『スッキリ！爽快！』

幽香

「何をやっているの？」

D H M O

「何でもないよ。俺はD H M O。最初に言ったけど君に会いに来た

んだ。」

幽香

「それだけ？なら・・・」

D H M O

「弾幕ごっこはやらないよ。どんな理由があっても美しい女性とは戦わない主義だから。」

幽香

「・・・／＼」

D H M O

「それに美しい花畑を傷つけないからね。」

幽香

「そう。ならあなたに興味は無いわ。消えなさい。」

D H M O

「君の顔を見たから、今日の所はそうするよ。また明日ここに遊びに来るよ。」

幽香

「・・・っ！」

来た道を帰るD H M O。

去った後に幽香は一言つぶやいた。

幽香

「また明日・・・か。ふふ♪／＼／」

嬉しそうに、楽しそうに笑っていた。
それは太陽の様に。

《執夢執》

いや～ようやく一人目か。他の皆は平気かな～？

この僕にスペルカード、それも二枚使わせるとは。
あいつでこの程度なら次はもっと厳しいかな。
カードとアイテムでも用意しようか。

パトラッシュ、僕もう疲れたよ

これは小さな町の、小さな教会で起こった一つの物語

その町の名前はエロサレム。

その町には”性欲の母”と呼ばれる”聖母エロス”を象った石像を教祖とする”エロティック教会”があった。

エロサレムから少し離れた所に”エロティック村”と呼ばれる小さな村があった。貧しい村であったが、人々は互いに助け合い楽しくそして幸せに一生懸命に暮らしていた。

その村に一人の老人と一人の少年が共に生活をしていた。

老人の名は『エムロ・アン・アズナブル・サーシエス』、少年の名は『ティエレン・ド・エロリア・レンヨ・ルブランド・ヴァリエール』

少年は貴族だったが、他の貴族の企みにより家ごと焼かれるはずだった。

炎の中必死で少年、”ティエレン”を守る両親。そこに駆け付けたのが、当時執事長をしていた”エムロ”だった。

エムロ

「旦那様！奥様！お怪我は？」

瓦礫を退けながら二人の安否を確認するエムロ。

ティエリア（ティエレンの父）

「私は大丈夫だ。しかし、リジエネが……………」

エムロ

「奥様が！どうかなされたのですか！」

ティエリア

「足が瓦礫の下に挟まっていて「大丈夫です。」リジエネ。」

ようやく二人のもとにたどり着いたエムロが見たのは火の付いた瓦礫に足を挟まれている彼の妻リジエネだった。

エムロ

「リジエネ様!!」

リジエネ（ティエレンの母）

「私は大丈夫です。落ち着きなさいエムロ。」

エムロ

「しかし「エムロ・・・」ティエリア様？」

ティエリア

「このままではお前も私たちも助からない。だから息子と、ティエレンと一緒に早く逃げてくれ。」

ティエレンをリジエネが、リジエネをティエリアが炎から身を呈してかばっていた。

エムロ

「そんな事は出来ません!! お二人も一緒に・・・」
リジエネ

「どの道助かっても私の命は長くありません。」

ティエリア

「私もリジエネを一人にさせたくない。それに一人にもなりたくない。」

エムロ

「それではティエレン様が一人になってしまいます!!」
ティエリア

「大丈夫だ。この子には”学問の天才・ヴェーダ”の血と”大天使

セラフイム”の加護がある。心配はいらんよ。」

エムロ

「だとしても！」

リジェネ

「だからこそエムロ、あなたに頼むの。”戦争の英雄・アムロ・レイ”の子孫であるあなたに……」

エムロ

「……」

炎は広がり続けている。このままでは全員が助からない。

エムロ

「……わかり、ました……」

リジェネ

「ありがとうエムロ。」

ティエリア

「私たちの分まで愛情を注いでくれ。」

エムロ

「はい……」

二人からティエレンを受け取るエムロ。

こんは状況だとゆうのに幸せそくに眠っている。

ティエリアとリジェネは笑顔だった。

エムロは無言で立ち上がり炎の中を走り抜けた。

ティエリア

「行ったか……強い子に育ってくれ。」

リジェネ

「大丈夫よ。私たちの子供ですもの。」

二人は自分達の息子が強く生きてくれるように願った。
二人は笑顔だった。
そんな二人を炎が、家が包みこむ。

<カット!!>

カメラマン

「はいOKですチェックお願いしますー。」

<うーん。いい演技ではあるけど緊迫感が足りないかな>

監督

「そうですか？これでもかなり追求したんですけどね。」

<スタッフウー、だいほんを持って来てくれるかい。>

スタッフウー

「はい。今いきます。・・・どうぞ。」

スタッフウーが持っていた台本のタイトルは

『劇場版 欲望戦士ヒソウテンレンヨウ Scaret Weather Rhapsody』

<ありがと。まあ、この映画はギャグでやるつもりだったけど、急に感動する映画にしくなってるね。>

監督

「このセリフを見れば誰でもそう思いますよ。」

この作品、以外に人気のあるシリーズである。

生みの親は『連夜』と呼ばれている。当初彼は16歳、高校2年生だった。

アニメ、ゲームなどの二次創作を投稿できる”小説家になろう”とゆうサイトを見たのがきっかけだそうだ。

彼が一番最初に投稿したのが『レンヨ』おゆう作品だ。

女の子と仲良くしたり、ハーレムを作ったりと、男の欲望丸出しの

作品だった。

ネットワールドでは大好評だった。

次に投稿されたのは

『欲望戦士レンヨ』

登場人物や舞台などが違うが前作の『レンヨ』と繋がりのある作品だった。

ネットだけでなく社会にも作品の名は知れ渡った。

彼の人気に便乗しようと多くの企業がグッズ、マンガ、ゲームなどを販売した。

しかし、本人の監修もなしに作ったのでオリジナルとは違う物になってしまった。

ネットワールドでは住人たちによる緊急会議が開かれた。

結論はデモによる粛清をすることになった。

それはテレビで報道された。結果はデモグループの勝利だが、企業による圧力で8割が捕まった。

連夜は同志の戦いを無駄にしない為に新しい作品を出した。

さらに過激に進化した

『欲望戦士レンヨ』ズッキュン♪バッキュン♪大作戦?』

以前の作品は全てエロスを抑えていたが、今回エロスメーターを振り切るものになった。

もちろん人気は核暴発。

企業もグッズを作ろうとしたが現実で確実に法律に関わる。

彼はそこも計算していた。

そして

『欲望戦士レンヨ』くそ☆みそテクニク』

『欲望戦士レンヨ』あなたは誰にも渡さない』

『欲望戦士レンヨ』お父さん教えて♪』

『欲望戦士レンヨ』パパとの秘密?』

『欲望戦士レンヨ』今日から君も流派・妄想不敗』

『欲望戦士レンヨ』男の娘は女の子』

など多くの作品を生み出した。

もちろん人気はビッグ・バン。

そんなある日連夜は二人の人物と出会った。

『欲望は人間である証』を合言葉に活動している組織”エロスタル・アハンイング”の創設者『エロイヤ・スキンベルグ』

『常識は必要ない。俺は映画を撮影するだけだ』と言っている『監督』

二人は連夜と対談した。

『自分の思う通りの欲望を作ってみないか？』と

それからは流し素麺をして、流れが思う以上に速かった。

正式なマンガ化、ゲーム化となった。キャラクターは本人の思い描いた通りに。

アニメ化の時は主役は本人、他のキャラは経験のある声優陣。

社会現象となり世界経済の一端を担うまでになった。

ある日一冊の台本がエロイヤに届いた。それっきり連夜と連絡は途絶えた。

エロイヤ

「こんな事になるとは誰も思わなかっただろう。」

監督

「見つけたのかエロイヤ？」

エロイヤ

「ああ、最高の逸材だ。」

くよし、次のシーンの撮影にはいろいろ。>

リジェネ

「ちよつといいかな？」

く君の役が女性である件に関しては苦情は聞かないよ。>
リジェネ

「くっ・・・どうしてく分かったのかって>・・・！」

<脳量子波を使えるのは君だけじゃないよ。>
リジエネ

「なら話が早い。配役を変えてほしんだけど。」

監督

「それは無理だ。」

リジエネ

「どうして!」

エロイヤ

「もう決まっちゃったからの。」

<それに嫌だと言っているのにベツトシーンは楽しんだじゃないか
ゝ>

リジエネ

「あれは、ティエリアが・・・／／／」

ティエリア

「なるほど。どうやら君を満足させられなかったようだねリジエネ。」
リジエネ

「ティ、ティエリア・・・／／／」

<よっ、男ったらしゝ>

ティエリア

「ふ、否定はしないさ。」

監督

「二人はラストシーンまで出番ないから休んでくるといい。」

ティエリア

「そうさせてもらおう。イこうカリジエネ。」

リジエネ

「ちよつと、離して、ティエリア、ティエリア!」

エロイヤ

「さて、私はカメラをセツティングしてくるとしよう。」

エムロ（もといアムロ）

「あの二人は人気があるからか?」

エロイヤ

「ああ。顔はそっくりだが、性格やしぐさが違うからな。」

<そろそろ次のシーンに入るよ。エムロさん準備は？>

エムロ

「わかった。エムロ、行きまーす!!」

<よい、ハックション!!>

炎の中屋敷を脱出したエムロとティエレンは近くの村、エロティツク村にやってきた。

村人たちに事情を話したところ、快く受け入れてくれた。

この事件は『ヴァリエールの火刑』と呼ばれた。

それから10年の月日がながれた……

レンヨ（ティエレン）

「おはよう、エムロおじいさん。」

エムロ

「おはようレンヨ。よく休んだかい？」

レンヨ

「はい！」

エムロ

「さあ、牛乳の配達にいこうか。」

レンヨ

「はい。」

ティエレン、いやレンヨは12才の少年になっていた。今はエムロじいさんと一緒に牛乳配達をしている。

エムロ

「お昼はまた学校かい？」

レンヨ

「ええ。僕が教えた方が同年の子がおぼえやすいみたいです。」

レンヨはまだ子供だが、大人のような口調や思考を持っているので時々教師の仕事をやっている。」

もちろん”美少年”なので男からも女からも人気が高い。だから町へ行くと

「レンヨく〜ん♪お姉さんとお茶しない？」

「お菓子を作ったんだけど食べてくれる？」

「子供用の可愛い服があるんだけど〜」

「おじさんと遊ばないか？」

色んな意味で人気がある。

今日も町の学校で授業を教えるレンヨ。

レンヨ

「ここまでで質問は？」

ネロ

「はい！」

レンヨ

「なんだいネロ」

ネロ

「先生は好きな子はいるんですか？」

レンヨ

「ネロ、今は授業中だ。」

ネロ

「少し暗いダメですか？」

教室にいる全員の目が☆？♪になっていた。

レンヨ

「はぁ、少しだけだぞ？好きな人はいない。」
アレルヤ

「なら好きなタイプの女性はいるのかい？」
レンヨ

「そうだな・・・」

教室を沈黙が包んだ・・・

レンヨ

「優しくて・・・母性にあふれた女性かな・・・」

パリンッ！！

と何かが割れた。

ネロ（男の娘）

「（ウソ・・・）」

アレルヤ（二重人格）

「（確か、彼は・・・）」

アベンヌ（男）

「（それでも・・・）」

コーリンヌ（ふんどし）

「（本能・・・性欲のままに・・・）」
レンヨ

「もういいだろ？授業を続ける。」

配達の仕事も教師の仕事も賃金は高いわけではないが、レンヨは毎日を楽しく過ごしていた。

そんなある日

レンヨ

「エムロおじいさん!!」

エムロ

「レ、レンヨ。心配しなくても私は大丈夫だよ。」

レンヨ

「嘘です! 医者にも言われたでしょう! どうして……」

エムロ

「ご両親の願いだからな。お前を守るのが私の仕事、ゴホッ……」

レンヨ

「おじいさんっ!!」

エムロ

「もう長くない……レンヨ、話を聞いてほしい。とても大切な話だ……」

レンヨ

「話……?」

エムロ

「お前の両親の話だ。」

レンヨ

「!!……父と母の……」

エムロは話した。父と母の真実を、レンヨの出時を全て。

エムロ

「今スグ理解する必要はない。ゆっくり考えればいい。」
レンヨ

「僕は……僕は……」

それからエムロは静かに眠りについた。

永遠に……

エムロが死んでからレンヨは魂が抜けたようだった。

朝、起きたと思ったら一人でブツブツ言っただけまた寝るを繰り返していた。

ある夜

ゴーン……ゴーン……ゴーン……チーン……ゴーン……

レンヨ

「これは、教会の鐘……」

遠くから聞こえる教会の鐘。

おぼつかない足どりで教会に向かうレンヨ。

エロサレムにあるエロティック教会は年に一度、12月24日に聖母エロスの石像を公開する。

レンヨが教会に着いたとき、周囲には誰もいなかった。

レンヨ

「これが……」聖母エロス」

今のレンヨには聖母エロスが亡き母リジェネに見えてきた。

レンヨ

「母さん……母さん!!」

そう言って聖母エロス像に抱きつくレンヨ。

(レンヨ……レンヨ……)

レンヨ

「え……? 誰……?」

(もう、ガンバルのやめよ?)

レンヨ

「母さんなの?」

（みんなと一緒に帰ろ）

レンヨ

「母さん・・・うん！」

さしのべられる手、掴むレンヨ。

その手はとても暖かった。

その姿は黒い鎧に身を包んだ天使だった。（セラフイムガンダム）
翌日、一人の少年が教会のエロス像の下で静かに横たわっていた。
人々は悲しんだ。しかし、少年は幸せな顔で笑っていた。
あなたは笑顔で死ねますか？

ここは天界。

幻想郷から見れば楽園。わかりやすく言えば”天国”

雲のような道のような場所を一人の少女が歩いていた。

???

「なによ！衣玖のヤツ！あよなに怒らなくてもいいじゃない。」

腰まである長い青い髪をゆらし、プンプンと文字が見えるくらい怒っている少女。

この少女の名は『比那名居 天子』

<連夜ルートヒロイン。そろそろ・・・>

天子

「それにしても暇ね・・・あら？何かしら？」

少し離れた所に何かがある。

駆け寄ってみると

天子

「何これ……人間？」

倒れていたのは一人の青年だった。（聖母エロス像の前で死んだレ
ンヨ）

天子

「！！……そうだ、イタズラしちゃお♪」

くヤラしいイタズラじゃないよ＞

天子

「おデコに”犬”って書こうかしら、それとも”スケベ”かしら。」

連夜

「……ん……ん……ん……」

おデコにイタズラしようとした時、青年（死んだレンヨ＝連夜）が
気がついた。

連夜

「ん……ここは……」

天子

「ここは天界よ。天人と成仏した人間の住む世界よ。」

連夜

「天界……（とゆうことは、幻想郷に来たのか。しかし奇妙な
夢だったな）」

天子

「あんた名前は？」

連夜

「（ここが天界なら彼女は・・・）名乗る時は自分からと教えてもらわなかったのか？」

天子

「ぐっ・・・わかったわよ！私は比那名居天子、この天界に住む天人よ！」

連夜

「僕は（比那名居）連夜。気がついたらここに居たんだ。」

天子

「気がついたら？死んでないとする、もしかしてアイツの仕業かしら・・・」

連夜

「アイツ？誰だいそれは」

天子

「気にしないで。それよりあなた、ちょうどいいは暇潰しに付き合いなさい！」

連夜

「別にかまわ「総領嬢様」ん？」

天子

「チッ！しつこいわねー。」

衣玖

「総領嬢様！！待ってください！」

遠くから呼ぶ声に舌を打って逃げ出す天子。

くよしこのタイミングだ言符『作者・in・ワンダーランド』>
時は止まらないよ。でも作者の計画通り

『天子の足もとに穴があく』

天子

「え？きゃああーーーー！！！」

衣玖

「総領嬢様！！」

連夜

「いけない！！」

天子が落ちた穴に飛び込む連夜

天子

「（アレ？力が出ない。そんな・・・このまま死ぬの？）」

連夜

「（落下速度が速い・・・）なら、ラファエル！！」

連夜の体が激しく光った。

気のせいが一瞬、背景に作業服とふんどしが見えた。

光の中から現れたのは白いボディに黒いモノを背負ったガンダム。

連夜

「よしっ！行くぞ！！」

一気に加速し天子に迫る連夜。

そして

連夜

「よしっ、掴まえた。」

落ちている天子に追いつき”お姫さま抱っこ”で抱える連夜。

連夜

「気を失っているのか・・・ふう」

安否を確認し、落ちた穴に戻っていく。

天子

「・・・ん、うーん・・・」

――やーい、不良天人――

――ふん！名居一族であっただけで天界に住むなでと――

天子

（これ・・・子供の頃の・・・）

（寂しかったのかい？）

天子

（誰？）

（誰だろうね）

天子

（ふざけないでっ！！）

（ふざけてないよ。君の願いを叶えてあげるよ♪）

天子

（私の願い？）

（目を開けるとわかるよ）

目の前が光始めた。

天子

「うーん・・・あれ？・・・どこ？」

連夜

「気がついたかい？」

声を掛けられて自分の置かれている状況に気づいて

天子

「にゃああああっ／＼／＼」

連夜

「おっ、おい！暴れるな！！」

ジタバタ暴れたので、ガツシリ押さえると

天子

「ふみゃあああ／＼／＼／」

と急におとなしくなった。

連夜

「まったく、もうすぐ上だ。おとなしくしてるんだ。」

二人が落ちた穴からは永江衣玖が顔を覗かせていた。

天子

（コイツがアタシの願いを叶えてくれるのかしら。）

《オマケ》

天子

「ねえ、衣玖、苗字ってどうやって変えるの？」

衣玖

「はい？」

天子

「な、なんでもないわ／＼／」

結局彼をどうするかって？ ん〜 ……その場のノリ？

《欲望の神殿・執務執》

いや〜『劇場版 欲望戦士ヒソウテンレンヨ〜Scarlet WeatherRhapsody』、大好評だねえ〜。
グッズやマンガの売り上げも上々、映画館も連日満載。
その結果、ケース900個の売り上げ。
笑いが止まらないのうケケケケケ……
そして、この特別な写真集『激戦！！激闘！！僕の・私のお嫁さん』。
。これを出版すればさらに……………。

説明しよう。いや、説明するまでもない。

世界経済を狂わしたと言っておこう。

特別な写真集とは、幻想郷の住人達の日常を激写したモノ。

おっ？これはDHMOと初めて会った時の幽香か〜。眩しい笑顔だねえ〜♪

こっちは天子か、赤くなっちゃって〜カワイ〜ねえ〜♪

むむっ！まさか…………あの四季映姫にこんな趣味があったとは……

…………

にとりの下着って、どう見てもスク水だよなあ〜？

これはいがいだなアリスと永琳、集中していると別人に見えるよ。

情けないねえ天狗ども。自分が撮られた事に気づかないとは。

白、縞、水色、ピンク、苺、水玉………… ふむ、選り取りみどり〜♪

だらしない寝顔だなレミリア。

どの写真も“何処から、どうやって撮った”と思う物ばかり。
本人曰く「え？普通に撮れたけど？」だそうだ。

しかし、コレを世の男どもの手に渡らせるのもなく。

売ればかなりの額の金が入るんだけど、個人的には独占したい
し……..
うーん…… ゆっくり考えるか……..

《その頃、幻想郷》

s o u

「無事に幻想郷に着いたのは良いけど、何処？」

何事もなく到着したs o u。姿も元通り。
しかし…….. しかし、しか

s o u

「迷った……..」

《八雲家では》

紫

「らーん、らーん？」

藍

「何ですかー紫様？」

紫

「ちょっとね。少しその辺を見てきてくれるかしら？もちろん歩いてよ」

藍

「はぁ・・・その辺を歩いて・・・わかりました。それでは行っ
てきます」

紫

「行ってらっしゃい」

《んで、戻って迷子中》

s o u

「どうしよう・・・」

歩き疲れて座りこむ。

s o u

「はぁー、これからどうしようかな・・・ もう少し休んでから
考えよう。」

膝を抱えてウトウトしはじめたs o u。

しばらくすると静かな寝息が聞こえてきた。

《紫に見回りを命じられた藍は》

藍

「まったく紫様は。いつも突拍子にモノを言う」

自分の主へ文句を言いながらも仕事をする藍。やはり式とゆう事である。

藍

「とりあえず異常は見当たらないな。ん？あれは・・・」

何かを見つけ駆け寄ってみると

藍

「（人里の？いや、服装からして外来人か・・・）放っておく訳にもいかないな」

souを起こす為に体を揺する。

藍

「ほら、起きないか。こんな所で寝るのは危険だぞ」

sou

「・・・・・・・・んー・・・・・・・・だーれー・・・・・・・・？」

【souの寝起き!!】

【藍は250のダメージを受けた!】

藍

「ぐっ!! 耐えろ・・・耐えるんだわたし! 私に「あ、あのく?」
つとすまない。私は八雲に仕える式神の八雲藍だ。君はどうしてこ
んな所で寝ていたんだい?」

sou

「幻想郷に着いたのはよかったんですけど、森の中だったので迷っ
てしまつて。」 藍

「歩き疲れて寝てしまったと・・・(ん? まで、今この少年は幻想
郷と言つたな。隔離されたこの世界を知っているとは・・・)」

sou

「あの、八雲さん?」

藍

「うん? どうした?」

sou

「いえ、何だか難しい顔をしていたので・・・」

藍

「(深く考えてもしようがないか・・・) とりあえず私達の家に
来るといい。」

sou

「え!?! いんですか?」

藍

「こんな森に君を一人にするわけにもいかない。」

sou

「ありがとうございます! 八雲さん!」

【souの満開の笑顔!!】

【藍に999のダメージ!】

【藍は力尽きた・・・】

S O U

「八雲さん！？八雲さー！ーん！！」

藍

（最後に素晴らしいモノを・・・・・・）

《八雲低》

紫

「あらあら・・・ 藍もまだまだね。」

＜仕方ないよ。彼は“世界を滅ぼす力”をもっているからね。＞

紫

「あなたは平気なの？」

＜君もずいぶんと余裕な表情だけど、何秒めつかな？＞

紫

「私も随分て甘く見られたわねえ。」

＜クツクツクツ・・・・・・ まあ楽しませてもらうよ。＞

胡散臭い二人の会話が行われていた。

戦場で戦った兵士がどこに逝くかって？そりゃ…………

西暦…………

それは人々の地球での歴史。文明の歴史でもあった。

地球での爆発的な人口増加に地球連邦政府は人々を宇宙へ、『宇宙移民政策』を掲げた。

数基のスペース・コロニーが完成し、人類の宇宙への移民が始まった。

宇宙世紀の幕開けであった。

同時に戦争の歴史でもあった。

地球連邦政府は地球から宇宙に住む人々を支配しようとした。それに対抗したのはサイド3、『ジオン公国』である。

宇宙世紀0079 9月18日

サイド7において民間人アムロ・レイがモビルスーツ”ガンダム”を操縦し、ザクに勝利。

このニュースは連邦、ジオンの両陣営に広まった。

ジオンサイド7に部隊を派遣した。部隊を指揮するのはスコーピオン・アズナブル少佐。

スコピオン

「連邦の新兵器か．．．．興味深いな」

量産機とは言えあのザクを撃破したのである。高性能であるのは間違いない。

オペレーターA（連夜）

「少佐！もうすぐサイド7の宙域に入ります。」

スコピオン

「よし！モビルスーツの発進準備だ！」

オペレーターB（欲望神）

「しかし、まだ敵影の反応がありません。今出撃なされても．．．．」

スコピオン

「それでは遅いのだ。戦いとは相手の一手先、二手先、三手先を読むものだ。」

オペレーターB（欲望神）

「了解です！発進準備を急がせます。」

オペレーターは作業を急ぐよう指示を出した。

スコピオン

「（さて、この先に何が待ち受けているのか．．．．）」

《サイド7・宇宙港》

ブライト（陸攻）

「ホワイトベースの発進準備はどうか？」

ミライ（黒清音）

「あと少しで完了します」

ブライト（陸攻）

「急いでくれよ…… すぐにでもジオンの連中が嗅ぎ付けて来るぞ！」

セイラ

「落ちついてブライト！焦っても物事が動くわけではないのよ。」

ブライト（陸攻）

「……！？すまない、セイラ。だが「艦長！周辺宙域に複数の艦が接近しています！」クソッ！ミライ、ホワイトベース発進だ！！」

ミライ（黒清音）

「了解！エンジンの出力を上げて、一気に外に出るは！」

ブライト（陸攻）

「セイラ。ガンダム、ガンキャノン、ガンタンク出撃だ。」

セイラ

「了解しました。アムロ、カイ、ハヤト聞こえて？ジオンが来るは出撃準備を」

アムロ（DHMOその1）

『ジオンが！？クソッ！なんだってんだ、ジオンめ！』

カイ（DHMOその2）

『しゃーない。逝きますか』

ハヤト（DHMOその3）

『落とされる訳にはいきませんからね！』

急いで準備にはいる三人。

セイラ

「お願いね」

三人に声をかけるセイラ。

ブライト（陸攻）

「ガンダムとガンキャノンは前に出て敵を迎撃。ガンタンクはカタパルト上部にて対空防御だ」

宇宙とゆう状況を考え、指示を出すブライト。ガンダムとガンキャノンは問題ないが、ガンタンクでは自由に動けない。それでも出さないよりはマシだった。

《ムサイ・ブリッジ》

オペレーターA（連夜）

「サイド7より戦艦が現れました」

スコープオン

「ムッ！？やはり来たか・・・ザクの発進準備はどうか？」

オペレーターB（欲望神）

「いつでも逝けます！」

スコープオン

「よし、出撃だ！私も出る、後はまかせたぞ。」

S O U

「あ、あの・・・少佐・・・」

ブリッジからでようとするスコープオンにためらいなら声をかける士官がいた。

スコープオンの身を心配しているようだ。

スコピオン

「安心したまえ。私は君を悲しませるような事はしないさ」

S o u

「少佐・・・ んむっ!？」

士官のアゴを持ちキスをするスコピオン。

その一瞬がとても長く感じた。ゆっくり離れ何も言わずに格納庫に向かうスコピオン。

S o u

「・・・・・・・・／／／」

それを見ていた二人は

オペレーターA（連夜）

（これは・・・ まるで死亡フラグじゃないか？）

オペレーターB（欲望神）

（本当なら逆襲まで逝くつもりだったけど、ソレやるとさあア・バ
オア・クーまでやらないといけないから・・・）

オペレーターA（連夜）

（ならZはどうするつもりだ？）

オペレーターB（欲望神）

（Zは割愛する予定だよ。でも今から大気圏の近くで戦うから・・・）

オペレーターA

（なるほど・・・ そういう事か！）

かなり不謹慎な事を言っていた。

ホワイトベースが逃げ！！
ムサイ三隻が追う！！

《ムサイ・格納庫》

スコーピオン

「よしっ！出撃だ、逝くぞ！！」

三隻のムサイから

スコーピオン専用グフカスタム

シャア専用ザク×3

シャア専用ゲルググ×3

リックディアス（赤）×3

百式×3

サザビー×3

シナンジュ×2

が出撃した。

言わなくてもわかってほしい・・・

《ホワイトベースブリッジ／格納庫》

オスカ（＃）

「敵艦よりモビルスーツ発進！数、十八！？かつ、艦載機を全て出したようです」

ブライト（陸攻）

「くっ！大気圏突入前に沈める気か・・・」

セイラ

「

各機、ただちに発進してちょうだい！」

敵の思わぬ行動に対し、セイラは三人に指示を出す。

アムロ（DHMOその1）

『了解！ガンダム、アフロ逝きまゝす！！』

カイ（DHMOその2）

『こんな所で！？ケツ、ガンキャノン、貝・市電でるぞ！』

ハヤト（DHMOその3）

『ボクだって！ハヤト・コバヤシ、ガンタンク、イキます！』

セイラの指示により出撃する三人。

アムロ（DHMOその1）

『カイさん、ボクが前に出ます！』

カイ（DHMOその2）

『オーライ、援護はまかせな！』

フォーメーションを組みながら迎撃に向か二人。

ハヤト（DHMOその3）

『くやしいけど、コレが性能差か・・・それでも』

カタパルト上部で攻撃の準備をするハヤト。

それを見たスコーピオンは

スコーピオン

「出てきたか。しかし、結局はモビルスーツの性能差で決まるのだと教えてやろう。」

そう呟いた。

確かに性能差は申し分ない。しかし、その油断が命取りになる。

アムロ・カイ

「もし、あの機体に乗っているのが女性なら・・・」

無意味な葛藤をしていたが、機体が機体なので・・・

アムロ・カイ

「（なんだ、アイツか・・・）」

なんのためらいもなく引き金を引く鬼畜二人。

だが簡単に落ちないのがシャアシリーズ。ゲルググ以外が攻撃をかわした。

スコーピオン

「やるな連邦のモビルスーツ。ゲルググを撃墜するとは。だが・・・

」

散会し、反撃にでるシャアシリーズ。

ガンダム、ガンキャノンを包囲しながらビームライフルを撃つ。

アムロ・カイ

「くっ！ピッエゝるは伊達じゃない！！」

ヒラリヒラリと攻撃をかわす二人。

スコープオン

「何だこの感覚は！？この感じニュータイプか！？」

敵の動きを見ていたスコープオンはそう考えた。

確かにニュータイプならそれくらいの芸当はできるであろう。

しかし、その考えは間違っていた。

なぜなら彼らは

アムロ・カイ

「パピッ！ヨンッ！」

ニュータイプではなくピエロであつたのだ。

だが彼らは気づいていなかった。自分が大気圏に近づいているのに。

ミライ（黒清音）

「ブライト、このままじゃ・・・」

ブライト（陸攻）

「ああ、だがチャンスでもある。大気圏突入用意!!」

いち早く動いたのはホワイトベース。このまま振りきるようだ。

ブライト（陸攻）

「ハヤト、これよりホワイトベースは大気圏に突入する。それまでに敵を追い払ってくれ。」

ハヤト（DHMOその3）

「わかりました。ブライトさんも急いでくださいよ」

ブライト（陸攻）

「わかっている。隔壁をを降ろせ!」

ブリッジの窓に耐熱シャッターが降りる。

ハヤト（DHMOその3）

「（こっちも危険だけど、それは相手も同じだ。）」

相手はザクとリックディアス。ガンタンクでも対処が可能な機体だ。キャノン砲とガンランチャーで弾幕を張るハヤト。

次々に爆発する機体。

最後ね一機、リックディアスが爆発する直前に放った攻撃。

それがガンタンクのキャタピラに直撃した。

ハヤト（DHMOその3）

「うわああ!?! 直撃!?!」

その衝撃でホワイトベースから落ちるガンタンク。

マーカ―

「あっ！ガンタンク、ホワイトベースから離れます！」

ブライト（陸攻）

「なんだと！ハヤト聞こえるか？ハヤト！」

ハヤト（DHNOその3）

『あ、ああ。ブライトさん。ホワイトベースは無事ですか？』

ブライト（陸攻）

「今すぐハッチを『ダメですよ・・・』何を言っているんだ！」

ハヤト（DHMOその3）

『そんなことしたらホワイトベースも助かりません。それに・・・』

その瞬間、ガンタンクは爆発した。

カイ（DHMOその2）

『!？・・・ハヤト？・・・くっ、クソツタレー!!』

ハヤトの死を感じたカイは自分が相手をしている百式とサザビーに
対し声をあげながら突っ込んだ。

カイ（DHMOその2）

『ちくしょうっ!!ハヤト、ハヤトはぁー!』

ビームライフルとキャノン砲を撃ち尽くしたにも、カイは接近して
いった。

カイ（DHMOその2）

『うおおおー!』

百式に掴みかかり両腕を引きちぎり、自分の後ろにいたもう一機の
百式に投げつけた。

衝撃で爆発する二機。残るは四機。

アムロもハヤトの死を感じ、カイの怒りを感じていた。

アムロ（DHMOその1）

『ハヤト…… カイさん……』

だが油断はできない。自分の目の前にいるのは

スコーピオン

『やるな連邦のパイロット！だが、これでどうだ！』

アムロ（DHMOその1）

『うわっ！？こ、このおー！』

しかしスコーピオンだけでなくシナンジュも相手にしなくてはいけなかった。

刻一刻と時間が迫っている。

ブライト（陸攻）

『アムロ。もう時間がない！五分で決めろ！』

アムロ（DHMOその1）

『めっちゃくちゃ言わないでください！敵はあのスコーピオンですよ！』

ブライト（陸攻）

『だからこそだ。向こうも長くはもたない。』

アムロ（DHMOその1）

『言ってくれるよ……まったく』

大気圏までもうわずか。最悪アムロとカイは……
非常にも時間は流れるの……

ミライ（黒清音）

「大気圏に入ります。」

ブライト（陸攻）

「ガンダムとガンキャノンは？」

セイラ

「健在です。けど・・・」

カイ（DHMOその2）

『あゝあ、時間切れってか？イヤな機体だなコイツは・・・』

ガンキャノンは重厚なのでそのまま地球へと落ちていく。

カイ（DHMOその2）

『まったく、このまま耐えられるのかねえ？』

アムロとスコーピオンはまだ戦っていた。

アムロ（DHMOその1）

『あなたは！そうまでして戦う理由は？』

スコーピオン

『私には果たさねばならない事がある！その為に自分の手を汚してきた。』

アムロ（DHMOその1）

『人と人わかり合える。どうして相手を理解しようとしない！』
スコーピオン

『なまじ知性があるから、人は争うのだよ！』

アムロ（DHMOその1）

『そんな理屈でっ！！』

スコーピオン

『それが人間だっ！！』

その時、世界がまっしろになった。

CAST

アムロ・レイ＜DHMO＞

カイ・シデン＜DHMO＞

ハヤト・コバヤシ＜DHMO＞

スコーピオン・アズナブル＜スコーピオン＞

リッコウ・ノア＜陸攻＞

カノン・ヤシマ＜黒清音＞

セイラ・マス＜

オペレーターA＜連夜＞

オペレーターB＜欲望神＞

製作＜全部私です＞

《幻想郷・三途の河》

小町

「いやゝ変なモノを拾ってしまったな。映姫様に何て言おう？」

拾い物（棺桶）を乗せて舟を漕ぎながら小町は呟いた。

『幻想郷・四季映姫さまへ』と書かれた紙が貼ってあるのだ。不審物であっても届けなくてはいいけない。

小町

「仕事をサボってない口実にはなるなら私はかまわないけどね。」

相手は”あの”四季映姫だ。騙すことはムリだろう。

《幻想郷・最高裁判所》

小町

「映姫さまあゝ」

映姫

「何ですか小町？ あなた仕事はどうしましたか。」

小町

「仕事できたんですよ。あたいだって毎日サボっているワケではありませんよお・・・」

映姫

「まあいいでしょう。それで何かあったのですか？」

小町

「実は・・・」

そう言って持ってきたのは例の拾い物。

小町

「コレなんですけど・・・」

映姫

「棺桶？私宛なのが気になりますが、開けてみましょう」

棺桶のフタを開ける。

そこには・・・

<NEXT? YOKUBOU☆>

早く甘い話を書けって？

《幻想郷・魔法の森》

魔法の森。幻覚作用を持つキノコが多量に育つ森。

人妖を問わず足を踏み入れる事が少ない場所。

そんな森を一人の青年が走っていた。いや、正確には逃げているか・

#

「ハア・・ハア・・ハア・・ハア・・・　ここまで来ればいいだろう。」

息をととのえながら＃は呟いた。

右手にはビームライフルを持っているので妖怪にでも遭遇したのだろうか。

#

「しかし、あの生物は一体？」

自分を襲ってきた生物について思考しようとしたその時

#

「ッ！？　チツ、来たか！」

何かが近づいて来る気配を感じた＃はライフルをかまえる。

ガサガサ・・・ガサガサ・・・・・　　ガサッ！！

セイブツ？

「ウホ♪」

頭にブリーフかぶり、大事な所を葉で隠した裸の生物が現れた。

#

「チッ！」

舌を打つとライフルを向け引き金を引く。放たれた弾幕はセイブツ？の頭を貫いた。

重力に従って崩れ落ちる体。

#

「これで終わりか？」

腕を下ろそうとした時、背後からも現れた。

セイブツ？

「ウホホッ♪」

#

「くあっ！！」

反応が遅れてしまい避けきれず右腕を切られライフルを落としてしまふ。

セイブツ？

「ウッ♪ホウ♪」

セイブツ？が#を犯そうとしたその時、

アリス

「蒼符く博愛の仏蘭西人形」

四方から現れた人形が次々に弾幕を放っていく。
弾幕が消えるとセイブツ？の姿は消えていた。

アリス

「大丈夫？でもないわね。ケガは平気？」

#

「ああ。助かった・・・」

アリス

「とりあえず手当てした方がいいわね。私の家に行きましょう。」

#

「いや、問題ない」

アリス

「あるわよ！もう・・・ホラ、行くわよ。」

#の手を掴み歩き出すアリス。

その姿は美男美女。コンチクショウツ！

アリス

（い、以外に大きくて、温かいわね／／それに・・・）

#

（やわらかくて小さな手だな。それに髪もキレイだ。）

《欲望の神殿・祈りの間》

たまには石像とかもキレイにしないとね。

しっかしさあ、アレッて両想いだよね？

将来”バカップル”になるのかなあ……

???

「あ、あの／＼／＼」

うん？ 今日のお祈りは終わったよ。

???

「そ、そうじゃなくて・・・お借りしていたモノを持ってきたんですけど」

ああ！ この間の子か！ どうだい僕の研究成果は？

???

「はいっ！ とても参考になりました。」

ならその資料はまだ持っていたもいいよ。それに新しいモノを用意しよう。

???

「本当ですか！？ あっ、ありがとうございます／＼／＼」

主人公が自意識過剰ってどうよ？

《幻想郷・迷いの竹林》

黒き勇者

「はいっ！ 到着♪」

黒き勇者がいるのは迷いの竹林。

一度入れば出てくるのに時間がかかる場所。

ここに来るのは一部の人間だけ

黒き勇者

「まずはボクの鈴仙からかな？ ついでに他の子も落とすちゃうか♪」

<おいおい！ヒロインは決定しているはずだろ？>

黒き勇者

「えゝ、別にイイじゃん！」

<よくない！>

黒き勇者

「ヒロインはたくさんいる人が主人公でしょ？ だったらボクじゃないのゝ」

<君は鈴仙と早苗の二人って決めただろ？>

黒き勇者

「二人は妻で他の子は恋人。大丈夫、ちゃんと幸せにするから♪」
<言っても聞かないならこちらで制限をかけさせてもらうよ>

黒き勇者

「ふゝん？でも、ボクには効かないよ。フラグメイカーだからね。」
<余裕だね。わかったキミの好きにすればいいよ。後悔するなよ？>

黒き勇者

「最初からそう言えばいいのに」 バカだねえ」

鈴仙のいるであろう永遠亭に向かう黒き勇者。
自分勝手とはまさに彼のような人だろう。

<バカはお前だ・・・・・・・・>

黒き勇者

「ここがボクの愛の巣になるのか」

鈴仙

「何を言っているのですかあなたは・・・」

変なことを言っている黒き勇者にツツコム鈴仙。
普通じゃないのが幻想郷だが・・・

黒き勇者

「何って、何が？」

コイツはもつと普通じゃなかった。

鈴仙

「よそ者のあなたが何をしに来たのですか？ 危害を加えるなら・・・」

黒き勇者

「そんなことはしないよ。ボクは鈴仙に会いにきたんだよ」 (ニコポ発動)

鈴仙

「ッ／＼／＼!？」

ニコポ

それはニコッとするだけで女の子がポッとするフラグ奥義。
自称悪魔のフラグメイカーの黒き勇者も修得している……

鈴仙

「笑ってごまかせると思っているんですか？」

黒き勇者

「え!？（どうしてボクのニコポが効かないの!？）」

ありえない。自分のニコポが通じないなんて。
しかし、思い当たる事はある。

『後悔するなよ?』

黒き勇者

「（あいつか！ クソッ!・・・ でも、ボクには話術がある。）」

鈴仙

「何を企んでいるつもりか知りませんが、立ち去ってもらえませんか・・・」

黒き勇者

「ちよっ、ちよっと待って！ボクは鈴仙が好きだからここに来たんだよ。そんなヒドイこと言われるとボクは悲しいよ・・・」

鈴仙

「・・・・・・・・・・」

黒き勇者の言葉を聞き黙りこむ鈴仙。

一瞬の沈黙。

そして・・・・・・・・

鈴仙

「嘘ですね。」

黒き勇者

「ボクは嘘は言っていない！どうして……」

鈴仙

「どうして？そんなの目をみればわかります。あなたの目は何も言
ってません。」

黒き勇者

「……」

鈴仙の一言に何も言えない黒き勇者。

彼は一体どうするのか？

真実が、偽りか。

幸せは訪れるのか？

『BLOODEND・GUILLTINE』

大輪の薔薇！百合の花園？狩人の名は……

《幻想郷・紅魔館》

黒清音

「ふう、ようやくね。ここにレミリアが…… フフ／＼／」

彼女がやってきたのはスカーレット家。
目的？

黒清音

「永遠の幼女、合法的にやれるのはここしかないのよね♪」

人の恋路は十人十色だよ。

黒清音

「咲夜を調教するのも魅力的ね、まずは入りましょう。」

紅魔館に足を進める黒清音。

大きな屋敷なので門も大きい。門番も当然いるのだが……

美鈴

「……スウ……スウ……スウ……」

寝ているのだ。しかも立ったまま。

黒清音

「本当に器用ね．．． 抵抗しない娘を食べてもしかたないわね。」

美鈴を無視して中に入る。
中は外観以上に広かった。

どこかにレミリアがいるのだが時間がかかりそうだ。

黒清音

「．．．．で？ いつまで隠れているのかしら咲夜」

咲夜

「気づかれない自信はあったのですが．．．」

黒清音

「どんなに気配を消そうとも、女の子の芳醇な香りは消せない．．．」

「

咲夜

「アナタは何者ですか？」

黒清音

「教えてあ・げ・る♪ その、体に．．．ねっ！

咲夜

「しまっ．．．」

『アッ／／／ アア／／／／／』

一つの百合が散った．．．．．

黒清音

「この部屋ね・・・」

一つの大きな扉をみつけた。
ゆっくりと開ける。

レミリア

「ようこそ、歓迎するわ客人」

黒清音

「ずいぶんと手荒い歓迎ねレミリア？」

レミリア

「そうね。とりあえず咲夜を返してもらえるかしら？」

引きずられてきた咲夜の方に目を向けながら話すレミリア。

黒清音

「別に構わないわよ。ハイどう、ぞっ！」

レミリアの足元に咲夜を放り投げる。

レミリア

「大丈夫、咲夜？」

心配そうに声をかけるが返事がない。

呼吸は荒く、頬は赤くわずかに服がはだけていた。

咲夜

「ハア／＼／・・・ハア／＼／・・・クッ・・・アッ／＼／」

レミリア

「さ、咲夜？」

黒清音

「レミリアも一緒に・・・『楽しみましょう♪』」

その夜、紅魔館に幼くて艶やかな声が響いたという。
ナニがあったのかは・・・

誰にもわからない。

男よりも女の方がちゃんとした名前があるのか

《幻想郷・妖怪の山》

幻想郷には男が少ない。

いや、いるにゃいるがさ、名前がないだけのはず……
それを考えるとふんどしは運がいいのか。
そして今回の主人公はといえば……

河童A

「ねえねえ、もっと見せてよ」

河童B

「私はコレかな」

河童C

「え？ コッチの方がスゴいよ」

河童D

「この黒くて美しいライン／＼／＼……」

河童E

「発射できる数が素敵！」

河童F

「このスライドは中々……」

河童G

「撃つ瞬間のマズルフラッシュ!!」

周りに美人の河童に囲まれただけでなく……

にとり

「私のダンナはやっぱりスゴイよ／＼／」

にとりが後ろから抱き着いていた。

何この状況？ウゼんだよ！！

と言いたい人の為に説明しよう・・・

陸攻

「ここが、妖怪の山・・・」

彼の目的は幻想郷に流れついた銃器の回収。

陸攻

「当時のデータを再現した銃よりも、当時の銃の方が断然いい！！」

クラスに一人は必ず生息しているとされる“ミリオタ”

まさにその言葉を人間にしたのが彼だ。

オマケに国の許可を取ってライセンスまで持っているのですその生き方は本物である。

陸攻

「山に潜入するとはいえ、桃に入って流れるとは思わなかったであります。」

ドンブラコッコ、ドンブラコッコ。
川から大きな桃が流れてきました。

てか？

陸攻

「まずは種子島銃でも探してみますか？」

とりあえず動こうとしたとき後ろから何者かの気配があつた。

陸攻

「そこです！あります！」

バン！　バン！　バン！

腰に携えていたベレッタを振り向きざまに3発。
後ろのしげみに撃ち込んだ。

にとり

「こ、降参〜！」

手をあげて河童がでてきた。

にとり

「い、いや〜。珍しいモノを持っているようだから、ちょっと見せて欲しいなと思ってさ……」

陸攻

「それくらいなら隠れなくても言ってくれば良かったのです。」

にとり

「ほっ、本当！　かして、かして〜！」

で！！

現在に戻って……

河童ガールズ

「い〜な〜♪　あたしも欲しい〜♪」

陸攻

「（しばらくはこのままでいるのであります・・・）」

マジで殺したい方は武器貸し出し中
参加者募集します

ようやく本編？

《太陽の畑》

「こんにちはわ、幽香」

「何しに来たの？」

「君に会うのに理由がいる？」

「……勝手にしなさい／＼／！」

幻想郷は今日も平和であった。

「また明日」と聞いて喜んだ幽香だが、次の日DHMOが訪ねると

「……」

普段と変わらない表情だが

（ほっ、本当にきた／＼／！？）

私、どこもおかしくないかしら

／＼／！！）

と心の中では女の子であった。

彼が話しかけても何も言わないときもあり顔もムスツとしているが

（どうしよう・・・ 何て言えば言いのか／／・・・）

頭の中では大パニック。

決心して言葉を発したはいいが少々、強すぎた。

（はぁ・・・ 嫌われたかしら・・・）

しかし振り向けばやさしい笑顔。
恥ずかしいのですぐ顔をそらす。
ずっとこの調子である

その様子を見ているDHMOは

（可愛いなぁ／＞計画通り＜）

と思っている。

（もっと可愛い幽香を見たいなあ）＞僕に見れないイベントはない
！！<

この手の魔法は（ゆうかりん☆ノーと）誰か（自分）のために。

この手の勇気は（欲望は）大切な人を守るために。（自分色に染めるために）

『魔法少女＞処女＜リリカルゆうか』
始まります。

【この番組は御覧のスポンサーの提供でお送りします】

D H M O

風見幽香

ピッエール

阿部さん

ふんどし

天国も疲れる？

《天界》

「はぁ・・・」

一人のお坊さんが雲の上を歩いていた。

顔には「会社の上司が・・・」みたいなこと、書かれています。

「住む場所を提供してくれたとはいえ、こんな格好をさせられるとは・・・」

髪が野球的な短さで、服はエロティック教会にいた時のままだったので、奇妙な姿だった。

自分を助けたときはまさに『王子様』に見えたのだが、戻った姿がこれだったので

「・・・」

言葉を失った。

「総領娘様を助けていただき・・・」

「いえ、体が自然に動いただけで・・・」

衣玖さんは違うらしい。

「これからどうなさいますか？」

「とりあえずはその辺を歩こうかと・・・」

天子は考えていた。夢の中で聞いた声。

《私の願い》

「こういった場所もありますし・・・」

「それは興味深い・・・」

二人はまだ話していた。

「ちよっ、ちよっとアンタ？」

「なにかな？ボクはそろそろ行こうと思うんだが・・・」

「住む場所どうするのよ」

「何とかなるだろう」

「だったら・・・」

「だったら？」

「ア／＼・・・ アタシの家に来なさいっ／＼！！」

「素性も知らない相手をかい？」

「い、いいから 行くわよ！」

天子は連夜の手をとって歩きだした。

（結果オーライ！っと思うべきか・・・）

「アンタ、名前は／／／？」

「ボクは（比那名居）連夜。君は？」

「比^{ボソツ}那名居天子」

「比那名居か・・・」

「天子でいいわ／／／・・・」

「そうか。天子！」

「ナ、何よ／／／」

「これからよろしく頼む」

「！？／／／」

衣玖さんは？

（ついに総領娘様も・・・・・・・・・・
と！！）

春の訪れを皆様に知らせない

色んな意味でフィーバーしていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2539r/>

『幻想郷』と書いて『作者の欲望』と読む

2011年12月28日01時53分発行